ノート

ナチ党の地方指導者

野田宣雄

一

ワイマル期におけるナチスの興隆過程を解明する主な方法としては、次のようなものをあげうるであろう。

(一)まず第一に、国会や地方議会の選挙結果を分析し、そこから選挙におけるナチスの支持基盤の社会的性格を明らかにする方法である。この方法をとる研究は、シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン地方にかんするR・ヘベルレ R. Heberle の同時代的な研究①をはじめとして、現在にいたるまでおびただしい量にたっしている。そして、これらの研究は、ワイマル末期の選挙におけるナチスの急速な台頭は、主としてプロテスタント系の新・旧中間層（農民、手工業者、商人、職員等）の支持によるものであったという大まかな結論にかんしては、ほぼ一致を見ているといってよいであろう。②

ここで、こうした傾向の研究を網羅的に紹介することは、筆者の能力をこえている。この傾向にそう最近の研究の一例として、T・チルダーズ Th. Childers の論文③に簡単にふれておくにとどめよう。

これまでの研究の多くがかぎられた特定地域のケース・スタディにとどまっていたのにたいし、チルダーズの論文は、ドイツ全土にわたって人口一万五千から百万以上におよぶ約二百の都市をサンプルとして用いている。しかも従来の研究がワイマル末期の三つの国会選挙の分析にかたよっていたのにたいし、彼は一九二四年以降（場合によっては一九二〇年以降）のすべての国会選挙の結果を考察のなかに入れている。そしてそれらについて最近の計量的選挙分析の方法を適用しながら、各都市における人口の宗

派別構成や職業別構成と、ナチスやその他の政党の得票率との間にいかなる相関関係があるかを追跡し、そこからナチスの選挙基盤の社会的性格を浮かび上らせようとしている。

もっとも、チルダーズの結論そのものは必らずしも目新しいものではない。「ドイツ・ファシズムがもっとも成功をおさめたのは、旧中間層にぞくする小商人、手工業者、農民にたいしてであった。彼らは近代工業社会の出現にむすびつく社会経済的変化をおそれるか、または実際にそれに苦しみ、それゆえ、ナチスの退行的な反近代主義のアピールをもっとも受けいれやすかったのである」「選挙におけるナチスの支持は……近代工業社会の発展に大きな留保をしめし、自分たちの社会経済的地位について社会排他的な、職業身分的な見解をいだいているような、そういう社会グループに集中していたようにみえる」「当然のことながら、ナチズムは近代工業社会ともっとも顕著に結びついているような人びと、すなわち工業労働者階級の間にはもっともわずかの反応しか見出さなかった。そのうえ、ナチスの得票は、一九二八年後においてさえ都市化の度合と逆相関関係にあった。[4]」要するに、チルダーズの結論は、ナチスの反近代主義アピールの効果を重視したものになっている。

なお、やや細部にわたるが、次のようなチルダーズの指摘は注目にあたいする。《一九二八年以降、ナチスは新中間層のなかにも進出したが、しかし、新中間層におけるナチス支持は、恐慌の開始以後においても、旧中間層の場合ほどの浸透性や一貫性はなかった。新中間層を公務員とホワイト・カラーに分けた場合、恐慌期の三つの選挙において、ナチスの得票はホワイト・カラーとよりも公務員との間で相関関係が高かった。公務員、とくに下級の公務員はナチスの前資本主義的な身分秩序のうったえにとくにひっかかり易かった。[5]》

この指摘もふくめて、チルダーズの分析結果には検討の余地が残されていないわけではない。しかし、彼の論文は、ナチスの選挙基盤の分析が精緻化にむかいつつある最近の傾向をしめしているだろう。

㈡ナチスの興隆過程を解明する第二の方法としては、ナチスの党員の構成を社会学的に分析する行き方をあげることができる。この傾向にそう研究もすでに相当の量にたっしているが、もっとも本格的なものとしてM・H・カーター M. H. Kater の一連の論文にふれておきたい。

まず一九七一年に発表された「初期のナチ党の社会学的考察」と題する論文[6]では、カーターは、一九二三年のヒトラー一揆直前の四、七二六人のナチ党員（それは当時の全党員の八・五パーセ

ントにあたる）について分析をおこなっている。そして、この時期のナチ党には、手工業者をはじめとして商人、下層職員、農業者、専門労働者、下級官僚など、総じて下層中間層にぞくするものがつよく代表されていたこと、また、当時のナチ党はすぐれて農村的性格をもっていたことを指摘している。他方、一九二三年秋のナチ党は、指導的地位にある職員、高級官僚、大学関係者などの上層中間層や、また不熟練労働者にはあまりうったえる力をもっていなかったことも、同じ論文のなかで指摘されている。要するに、ヒトラー一揆前のナチ党は「すぐれて下層中間層的集団」であったというのが、この論文の結論である。[7]

一九七六年に発表されたカーターの論文は「ナチスの権力掌握過程におけるナチ党の社会的変化」という表題をもっているが、[8]それは右の一九七一年の論文の続篇をなすものである。この第二の論文では、まず一九二四～二九年の時期のナチ党の社会構成の分析がおこなわれる。そして、この時期においてもナチ党の社会構造はヒトラー一揆前と本質的に変らず、「不満をもった下層中間層の利益ロビー」という性格を保持していたことが確認されている。もちろん、一九二六年以降大学生の間にナチ党への接近がみとめられたこと、また医師の間にもナチ党がある程度浸透していたことなどの事実も見のがされてはいない。しかし、全体としては、上層中間層は、一九二五～二九年の時期においても下層中間層とは反対にナチ党に加入することが少なかった、とカーターはのべている。なお、労働者にかんしては、若干の例外は別として、一九二〇年代中期においてもそのナチスにたいする拒否的態度は変っていない、と指摘されている。[9]

カーターのこの論文は、さらに、一九三〇年以降のナチ党員の分析にも筆をすすめている。そして、ワイマル末期における小都市や農村の手工業者や農民のナチ党への流入にふれ、「ナチ党はワイマル共和国の最後の数年においても、すぐれて下層中間層の集団でありつづけた」とのべている。カーターは、この時期におけるナチ党の内部構造は依然として「すぐれて下層中間層的」であったがゆえに、上層ブルジョアジー出身の新入党員、とくに「九月党員」（一九三〇年九月の国会選挙におけるナチスの進出を見て入党した連中を指す）は、数のうえで優勢な小ブルジョアジーの党員に抑えられていたにちがいないとみなしている。[10]

カーターの論文は、以上の分析につづいて、さらにナチ党のエリートにかんする興味ある考察を展開しているが、この点については後段であらためてふれる機会があろう。ともかくも、右に紹介したカーターの二つの論文は、多くの統計に依拠した分析を通じて、ナチ党の社会的構造の解明に大いに貢献している。

なお、カーターの第二の論文と同時に発表されたH・A・ヴィンクラー H. A. Winkler の「中間層運動か国民政党か――ナチ党の社会的基盤について――」と題する論文[11]も、ナチ党員の構成を手がかりにナチ運動の性格を論じようとしたものである。この論文について注目される点は、ナチ党員のなかの労働者にもある程度考慮がはらわれていることである。すなわち、一九三〇～三三年の間にナチ党における労働者の比率は二六・三パーセントから三一・五パーセントに上昇しており、このことはヒトラーの運動が純粋な中間層政党の枠をつきやぶったことを示唆するものだ、とヴィンクラーはのべている。そして、これらナチ党に加入した労働者は、農村から出てきたばかりで労働組合にもあまり組織されていないような市電従業員、東エルベの農業労働者、ザクセンやテューリンゲンの家内労働者、小経営で働く非自立手工業者および労働者、また若干の公共部門――とくに郵便、鉄道、水道、ガス、電気関係――の労働者など、総じて「非典型的な労働者」が多かったことを指摘している[12]。これまでナチ党員の間における中間層の比重の高さに目をうばわれて見のがされやすかった労働者の問題に注意を喚起したものとして、こうしたヴィンクラーの指摘は貴重であろう。

㈢ナチスの興隆に接近する第三の方法としては、社会グループのそれぞれについて個別的にナチスとの関係を解明してゆくやり方がある。すなわち、手工業者、商人、農民、労働者、職員、大企業家といった各社会グループとナチスとの関係を個別的に見てゆくのである。

この方法についてもナチズム研究はすでに相当の蓄積をもっており、ここではそれらのうちの目ぼしいものを列挙することで満足しなければならない。

(a)まず、ナチスの興隆を支えたもっとも重要な社会的基盤である中間層、とくに手工業者と商人については、ヴィンクラーの『中間層・民主主義・ナチズム――ワイマル共和国における手工業と小商業の政治的発展――』と題する著名な書物がある[13]。この書物では、帝政時代の「保護された中間層」、すなわち手工業者および小商人が、ワイマル期に入って自分たちの社会的地位について不安をつよめ、政治的にも諸政党の間を右へ右へとわたり歩く不安定な行動様式をしめしたのち、最後にナチスに避難所を見出すまでの過程がのべられている。手工業者および小商人がナチスに接近する過程を歴史的パースペクティヴのもとにはじめて総合的に論じたものとして、大きな価値をもっている。

(b)次に、労働者階級については、アメリカの研究者M・H・ケレ M. H. Kele による『ナチスと労働者――ドイツ労働者へのナ

チスのアピール、一九一九～一九三三――』と題する書物がある。[14] この書物は、ナチスと労働者との関係をおそらくはじめて本格的にとりあげたものとして注目にあたいする。ただし、当時のドイツ労働者のナチスにたいする態度の詳細な分析をこの書物に期待すると裏切られる。副題にもあるように、著者の主要な関心は、ナチス左派の問題を中心にもっぱらナチスの労働者にたいするアピールの面に注がれているからである。しかも著者は、当時のドイツにおける労働者の概念について大きなあやまりをおかしている。すなわち、ナチス左派の活動やナチス経営細胞の成長にふれたのち、ワイマル末期のナチ党は労働者階級政党の性格をつよめていたと論ずるのだが、その場合、労働者の概念をあまりにも拡大しすぎている。「手と頭脳の労働者」といったナチスの宣伝文句をそのまま受けいれ、著者は職員層をもしばしば労働者の範疇のなかに入れている。[15] これは、当時のドイツの身分状況にふさわしくない解釈である。

(c)労働者にくらべた場合、職員層については最近になってめざましい研究の進展が見られる。この分野での先鞭をつけたのはJ・コカ J. Kocka である。彼は一九七三年にボーフムで開かれた国際シンポジウムの報告「ドイツ職員の問題」[16]において、ドイツ職員層に特徴的な身分意識を多角的に解明し、それとの関連においてこの層とナチズムとの間の「親和力」を解明してみせている。ここでは、ケレの場合とは逆に、労働者からみずからを峻別しようとする職員層の身分意識こそが、この層をナチズムに近づけたことが強調されているのである。[17]

(d)最後に、大企業家層とナチスとの関係をあつかった研究にふれておこう。この分野でのもっとも注目すべき業績は、H・A・ターナー H. A. Turner のそれである。彼は、すでにはやく一九六九年に発表した論文「ビッグ・ビジネスとヒトラーの興隆」[18]において、主として政治資金の流れの面から大企業家層とナチスとの関係を論じていた。そして、大企業家層がナチスの政権獲得を積極的に支援したとはいえないこと、ナチスの運動は資本主義競争において敗北を喫したか、もしくは敗北をおそれていた者の運動であったことを結論づけている。[19] その後ターナーは一九七三年のボーフムにおけるシンポジウムでも「大企業家層のナチ党にたいする関係」という報告をおこなった。[20] この報告で、彼はJ・クチンスキィ J. Kuczynski、K・ゴスヴァイラー K. Gossweiler、G・W・F・ハルガルテン G. W. F. Hallgarten、E・チホン E. Czichon 等の研究をつぎつぎと俎上にのせ、これらの研究に見られる大企業家の安易なグループ分けをきびしく批判している。たとえば、クチンスキィは企業家を「石炭＝鉄鋼」グループと

「化学＝電機」グループとに分けて、ナチスの権力掌握は前者の後者にたいする勝利を意味すると解しているが、ターナーは具体的に企業家の名前をあげてこうしたクチンスキィのグループ分けが事実に合致せぬことを明らかにしている。同様にして、ナチスへの態度について金融グループを「汎ドイツ系」と「アメリカ系」の二つに分けるゴスヴァイラーの見解も、また企業家を「匿名の会社」と独立した「家族企業」とに分けるハルガルテンの主張も、さらには、企業家を「ナチ系の工業家」と「ケインズ派」とに分けるチホンの見方も、いずれも事実の裏づけを欠くものとしてしりぞけている。そしてターナー自身は、個々の企業家のナチスにたいする態度を規定した要因としては、彼らの出自、世代、教育、職業上の経験、精神構造などが考慮さるべきことを主張しているのである。[21] ここでも、研究は少し前までの公式的な見方を脱して着実な前進を見せているといえよう。

二

前章では、ナチスの興隆過程にかんする最近の研究動向のめぼしいものを拾いあげて紹介した。この簡単な紹介からも明らかなように、ナチスの興隆にかんしては、それを支えた社会的基盤を解明することに多くの研究者の関心があつまっているといえる。しかし、こうした傾向と密接にかかわりあいながらも、ナチスの興隆については、最近になっていま一つの重要な研究の焦点が形づくられつつあることを見のがすべきではない。それは、一口でいえば、ナチスの興隆過程におけるエリートの問題にほかならない。

たとえば、すでに紹介したヴィンクラー――彼は西ドイツにおける「社会史」を代表する歴史家の一人である――は、これまで中間層を中心にナチズムの社会的基盤を解明することに主たる努力を注いできた。ところが、最近になって彼は、W・ザウアー W. Sauer の用いた「軍人上りの向う見ず分子」"military desperadoes" の概念を使用しながら、にわかにナチスの前衛の性格を問題にしはじめているのである。ヴィンクラーにいわせれば、ナチスのイデオロギーはたしかに中間層にその社会的起源をもっていたが、しかし、けっして中間層といった特定の社会グループの利害と一致するものではなかった。ナチスのイデオロギーは、いずれの社会グループの利害とも合致しない「特殊な政治的要因」だったのであり、ヴィンクラーはこのことを指して「イデオロギーの自立化」と呼んでいる。そして、なぜこのような「イデオロギーの自立化」がおこったのかといえば、それは、第一次世界大戦後の社会に広汎に見られた「根無し草化」の過程と密接

な関連があったというのである。すなわち、一九一八年後に市民生活に復帰できずにドイツ（あるいはイタリア）のファシズム運動で重要な役割を演ずるにいたった「軍人上りの向う見ず分子」という階級が新たに形成されたこと――このことをヴィンクラーは重視するのである。[22] いずれにせよ、社会史家のヴィンクラーがたんに中間層のような社会層の利害を問題にするだけではナチズムを解明し切れないことに気づき、新たにエリートの問題に接近しはじめていることは注目しておいてよい。

エリートの問題といえば、先にふれたカーターもまた大きな関心をそれにむけている。すなわち、前掲の一九七六年の論文のなかでも、彼はかなりたち入ってナチスのエリートの問題を論じている。たとえば、一九二五～三二年の時期のナチ党の帝国指導者 Reichsleiter をとりあげ、その三分の二が上層中間層の出身者であり、三分の一が下層中間層の出身者であったこと、しかし、三分の二をしめる上層中間層の出身者もその社会的地位ははなはだしく動揺にさらされていたのであり、したがって、全体としての帝国指導者の精神構造は、むしろ特殊小ブルジョア的な、下層中間層のそれであったことを指摘している。[23] また同じ論文のなかで、ほぼ同じ時期のナチ党大管区長 Gauleiter の分析もおこなわれ、その半数以上が下層中間層の出身者であったことも明らかにされている。こうしてカーターは、帝国指導者にせよ、大管区長にせよ、ナチ党のエリートが下層中間層のメンタリティを有し、それまでのブルジョアジー上層のように高等教育もうけておらず、したがってまた専門的な実務能力も欠いていたことを明らかにするのである。[24]

だが他方、カーターは、一九二九年以降の時期になると、ナチ党の組織の拡大などにともなって、右に見たようなナチスの「古参の闘士」とはタイプを異にする実務能力をもった上層中間層出身の専門家が党内のポストに進出してくることも見のがしてはいない。こうして、以後、第三帝国を通じて、ナチ党内では二つの価値体系――すなわち、下層中間層的（ナチス的）価値体系と、上層中間層的（中立的）価値体系――の二元主義が招来されることになる、とカーターはのべている。[25]

カーター自身が筆者に語ったことでもあるが、右の彼の論文におけるナチ・エリートの分析はまだ試論的なものにすぎない。しかし、それが今後の研究に重要な指針を提供していることは間違いないであろう。

ところで、ナチスの興隆にかんしては、地域別の研究が盛んにおこなわれていることも、最近の顕著な傾向である。ナチス興隆の地域別研究としては、すでに古典的ともいえるヘベルレのシュ

レースヴィヒ＝ホルシュタイン地方にかんする研究[26]があるが、そのほか現在にいたるまで、G・シュトルテンベルク G. Stoltenberg著『シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン農村民の政治的潮流一九一八～一九三三』[27]、W・ベーンケ W. Böhnke 著『ルール地域におけるナチ党一九二〇～一九三三』[28]、E・シェーン E. Schön 著『ヘッセンにおけるナチズムの成立』[29]、J・ノークス J. Noakes 著『ニーダーザクセンにおけるナチ党一九二〇～一九三三』[30]……等々の諸著作が発表されている[31]。これらの多くは必らずしも明確な方法論をもつものではなく、むしろ、できるだけ実証的に特定地域におけるナチ党の興隆過程を跡づけようとしたものである。にもかかわらず、これらの地域別研究を丹念に読んでゆくと、そこからもナチスの興隆過程におけるエリートの問題の重要性が浮かび上ってくるのである。

シュレースヴィヒ＝ホルシュタインにかんするヘベルレの研究は、これまでナチスの興隆の社会的基盤を明らかにしたものとして評価され、そのようなものとして利用されることが多かったようにおもわれる。たしかに、この書物は、選挙社会学的な分析方法を駆使しながら、この地域におけるナチスのもっとも主要な支持基盤がゲースト地帯における中小農民であったことを明らかにしている。けれども、注意ぶかく読むならば、この著者の関心は、たんにナチスの社会的基盤の解明ばかりでなく、それと並んで、エリートの交代の問題にも寄せられていたことがわかる。ヘベルレは、一九六三年に刊行された版の最後の註記において次のようにことわっている。「本来の計画によれば、政治エリートの社会的出身の変化をあつかった章がこのあとにつづく筈であったが、実行にいたらなかった。[32]」すなわち、著者はエリートの交代の問題に大きな関心を寄せながら、この点にかんしては本書が未完におわっていることをみとめているのである。

しかし、未完におわっているとはいえ、ヘベルレの記述には、すでにエリートの問題への重要な指摘があちこちに見出される。彼は、シュレースヴィヒ＝ホルシュタインの農村地帯におけるナチスの進出はこの地方の地域社会における政治的指導層の交代とふかく絡まりあっていた、とみなしている。もっと具体的にいえば、在来の農村の名望家層にぞくする大土地所有者や大農は、役所の長、自治体の首長、農業会議所の役員、郡議会・州議会の議員などのさまざまの立場において、「体制」に協力し、その共同責任を負ってきた。それゆえ、彼らはハンディキャップを背負うことになったのであり、ナチズムのようにこの「体制」に反抗する革命が進行したとき、それは必然的にまったく新しい政治的指導層の興隆を招くことになったのである。この新しい指導層は、

農村中間層（小農、手工業者、宿屋、レストランの主人）にぞくする人びとであり、また、この層もしくは中農出身の比較的若い農業団体職員、農業教師、獣医たちであった、とヘベルレはしるしている。そして、とくに興味ぶかいのは、ナチスの組織が農民の子弟の社会的ステイタスを上昇させる役割をはたしていたという彼の指摘である。すなわち「作男や作男の仕事をやっていた農民の息子は、突撃隊というまったく違った種類の階層秩序と社会的領域において、自分たちの職業生活によってはあたえられなかったような社会的威信を獲得できたのである。[33]」

ここでは、紙幅の制約もあるので、エリートの問題に重要な示唆をあたえてくれるいま一つの地域研究の例として、ノークスの研究をあげておきたい。

この研究は、表題もしめすとおり、ニーダーザクセン地方におけるナチスの台頭を実証的に追跡したものである。そこでは、もちろん、ナチスの台頭を支えた社会的基盤にも大きな関心がはらわれている。すなわち、農民をはじめとする中間層のとくに若い世代がナチスの主たる支持基盤であったことが明らかにされている。しかし、このノークスの研究を地域別研究のなかでも特色あるものにしているのは、それがナチスと他の民族主義 völkisch グループとの相違を明らかにすることに力点をおき、そこからナチスの成功の秘密を解き明かすという行き方をとっていることである。[34]

ノークスは、たとえば次のようなヒトラーの言葉を引用し、いかにヒトラーがナチスと他の民族主義グループとの間に一線を画することに意を用いていたかを強調する。「われわれと異なる意見をもつすべてのグループを攻撃する理由はないが、われわれと同じ意見をもっていると称しているグループは攻撃しなければならない。[35]」では、同じように民族主義的、反ユダヤ主義的立場をとりながら、しかもナチスを隣接する民族主義グループから区別していたものは何であったか。ノークスの書物は、両者の最大の相違点がエリートの性格にあったことを明らかにしている。すなわち、国家人民党にせよ、ドイツ民族主義攻守同盟 Deutschvölkischer Schutz und Trutz Bund にせよ、ドイツ社会党 Deutschsozialistische Partei にせよ、ドイツ民族主義自由党 Deutschvölkische Freiheitspartei にせよ、これらの右翼もしくは民族主義のグループの指導層は、依然として教養ある上層中間層の出身者たちによってしめられていた。これにたいして、ナチ党は、まさにこうした上層中間層をば「俗物ブルジョアジー」Spiessertum といった表現によってはげしく攻撃し、それにたいする反撥をみずからの結集の核としていたのである。たとえば、ハノー

ヴァ市におけるナチ党支部の設立者の一人であるザイフェルトは、ヒトラーにたいして次のようにのべている。「富裕な連中は、（われわれに）援助を拒んでいる。……彼らのすべての目的は、戦前の自分たちの優越した地位をとりもどすこと、そして、できれば他の者をして自分たちのために火中の栗を拾わせることにあるのだ。ドイツ民族主義攻守同盟にぞくしていた二年間に、わたしはこのことに目を開かせられた。[36]」

ノークスは、たしかに、ナチ党もまた新しい一つのブルジョア・グループであったことをみとめている。しかし、ナチ党にあっては「古いエスタブリッシュメントが、ナチ党の地方の指導層に代表されるような小ブルジョアジーに指導権をゆずりわたさねばならなかった」という点が、他のブルジョア組織との相違点であったとするのである。[37]その場合、ナチ党のエリートの特色はたんに小ブルジョアジー出身ということだけにあったのではない。そのほかに、年齢の若さ、また、その多くが軍隊や義勇軍の経験をもつところの、社会の根無し草 déraciné 分子であったことなどもノークスによって指摘されている。ノークスは、この書物の結論部分において、ナチスは二つの意味で革命的であったとのべ、第一には、ナチ党の幹部が「現状を転覆しようと願う下層中間層出身の『新しい』人間をふくんでいた」こと、そして第二には、ナチ党の組織が全体主義的であり、たんに当時のドイツの政治構造の変革ばかりでなく、ドイツ人の社会生活の伝統的パターンを打破しようとするものであったことをあげている。ナチ党は、とくにその初期において、社会的因襲や階級構造の厳格さから逃れたいという若い世代の願望にアピールするような政治のスタイルを生み出すのに成功したのだ、ともノークスはのべている。[38]

三

前章では、最近のナチズム研究の焦点として、エリートの問題が浮かび上ってきていることを明らかにした。すなわち、ナチスの興隆は、ワイマル期のドイツの地域社会や職業団体の内部におけるエリートの交代、世代の交代などとふかくかかわっていたのであり、ナチスの成功の秘密の一つは、それが新しい類型の人間によって活動的な前衛を形成しえた点にあったと考えられるのである。もっと具体的にいえば、主として中間層の下層の出身であり、比較的若く、深刻な戦争体験や義勇軍参加の経験をもち、既成のエリート・コースから脱落してしまったような社会のデラシネ的分子――ナチ運動は、このような連中に社会的威信獲得の場を提供したのだった。ナチスは、これらの分子の社会的威信を獲得したいという願望とふかく絡みあいながら発展したとみなされ

るのである。[39]

ところで、このようにナチスの興隆過程でエリートの問題が重要性をもっていたとすれば、次に問われねばならないのは、第三帝国の時代に入ってこの問題がどのような展開を見せたかということである。この点については、昨年発表した拙稿[40]において不充分ながらもふれるところがあった。そこでは、第三帝国時代の国家機構とナチ党組織とを対比し、前者においては伝統的な職業官僚が優勢であったのにたいし、後者においては、それとは対照的な人間類型の持主たちがエリートの地位に進出していたことを指摘した。とくにナチ党の大管区長 Gauleiter については、一九三八年の時点での一覧表を作成し、彼らについて次のような像を描き出しておいた。㈠彼らの年齢が地位のわりには低かったこと、㈡中間層の出身者が多かったこと、㈢学歴は、ギムナジウムから大学という正統なエリート・コースをあゆんだ者が比較的少なかったこと、㈣その多くが第一次世界大戦で深刻な戦争体験をもち、戦後はいちはやくナチ運動や類似の民族主義運動にとびこんだ「古参の闘士」であったこと。

右の旧稿においては、もちろん、大管区長よりも下位のナチ党指導者の性格についても若干ふれたが、その説明は不充分なものにとどまらねばならなかった。というのも、大管区長については、すでに依拠すべき文献が存在していたが、[41]中管区長 Kreisleiter、小管区長 Ortsgruppenleiter、細胞長 Zellenleiter、ブロック長 Blockleiter などについては個別研究が見あたらなかったからである。そして、この事情は現在にいたっても変ってはいない。それゆえ、さらに第三帝国下のナチ党エリートの解明をおしすすめようとすれば、少なくとも中管区長以下については、直接史料にもとづいて個別研究を重ねてゆくことが要求されるであろう。わたしが、今夏西ベルリンのベルリン・ドキュメント・センター Berlin Document Center を訪れ、さしあたっては中管区長についての手がかりをえようとしたのもこのためである。[42]

ベルリン・ドキュメント・センターは、西ベルリンの西郊、グルーネヴァルトの住宅街のなかにひっそりと横たわっている。アメリカ国務省の管轄下にある機関で、小じんまりとした建物ながら、周囲には有刺鉄線がはりめぐらされ、入口にはアメリカの衛兵が交代で勤務についている。わたしは、あらかじめ京都のアメリカン・センターを通じて研究上の目的で訪問したいと申し入れておいたので、比較的簡単に内部に入ることを許された。[43]

このセンターには、大きくいって四種類の資料が保管されている。㈠「ナチ党の記録」、㈡「親衛隊の記録」、㈢「ナチ党の付属組織の記録」、㈣「国家組織および半国家組織の記録」がそれで

ある。[14] このうち、㈠の「ナチ党の記録」にぞくするもっとも重要な資料は、なんといっても、尨大な量にのぼるナチ党の本部の党員カードである。この党員カードには、党員番号、氏名、入党年月日、脱党年月日、生年月日、小管区名、職業、住所、既婚・未婚の別、備考の各欄があり、それぞれに該当事項が記入されている。この本部の党員カードは、元の九〇パーセント以上にあたるものが現存しているといわれる。このほかに、似たものとして、各大管区ごとの党員カード（本部の党員カードにくらべて小型のもの）があり、これは元の約半分にあたるものが本部党員カードと並列して保管されている。「ナチ党の記録」の資料のなかで、これらの党員カードについで重要なのは、「党内通信」Partei-Korrespondenz として一括されている資料であろう。これは、ナチ党内のさまざまの機関相互間でかわされた文書や、また個々の党役員の履歴等についての資料をふくんでいる。一人一人の党役員ごとに関係資料がファイルされているが、個人によって資料の量や内容はきわめて区々である。

わたしは、今回の約十日間の訪問期間中、右にふれた二種類の党員カードと「党内通信」を利用しながら、第三帝国下の中管区長の性格を明らかにしようとした。調査の手順としては、まず最初に、一九三八～三九年当時のナチ党その他の諸機関の住所等を記載した書物“Reichsadresswerk”[15] のなかから、全国の中管区長の氏名を知ることにした。この書物には当時の全部で四〇の大管区の各々について中管区名および中管区長名が記載されているが、そのうち比較的新しくドイツに併合された一〇の大管区（Danzig, Kärnten, Kurmark, Niederdonau, Oberdonau, Salzburg, Steiermark, Sudetenland, Tirol=Vorarlberg, Wien）は当面の調査の対象から除外することとした。こうして三〇の大管区のあわせて六三五人にのぼる中管区長が調査の対象として浮かび上ってきたが、それは短期間で調査をおこなうにはなお規模が大きすぎるものであった。そこで、わたしは、三〇の大管区からそれぞれ三人ずつの中管区長を無作為に抽出し、あわせて九〇人の中管区長について調査をすすめることにした。つまり、一九三八～三九年当時の、ドイツ旧領土にぞくする地域の六三五人の中管区長のなかから九〇人を無作為にえらび出し、これをランダム・サンプルとして用いることにしたのである。

次に、わたしは、これら九〇人の中管区長について、各人の生年月日、入党年月日、職業を確定することにした。これは、すでにのべたような党員カードにあたれば比較的簡単に判明することのようにおもわれたが、実際に作業をはじめてみると、事はそれほど簡単ではなかった。というのも、ドイツには予想以上に同姓

同名が多く、同じ名前の党員カードが数十、数百と続くことは珍しくなかったからである。そのなかから当該の中管区長を見つけ出すことはほとんど不可能に近いことであった。そこで、わたしは、ただちに党員カードにあたる代りに、まず「党内通信」の資料にあたり、それによって各中管区長の生年月日を確認することにした。これは、すでにのべたように「党内通信」の資料が個々の党役員ごとにファイルされており、しかも各人のファイルには必らず生年月日が記載されているので、比較的簡単におこないうることであった。そして、いったん生年月日が判明すれば、党員カードのなかにいかに同姓同名が多くても、それらのなかでどれが目ざす中管区長のカードであるかを決めることは容易であった。こうして、若干の欠落部分はあるものの、ほぼ九〇人の中管区長について、その生年月日、入党年月日、職業を確定することができたのである。[46]

本来であれば、右の調査結果を各中管区長の氏名もふくめて一覧表にしてしめすのが望ましいであろうが、紙幅の制約もあるのでそれは断念する。代りに、この調査からえられた目ぼしい結果だけを列挙しておくことにしよう。

㈠まず生年月日は、九〇人の中管区長すべてについて判明したが、そこから、一九三九年一月一日の時点での彼らの平均年齢は三七・五歳であることがわかる。また、第一表は、年齢帯ごとの人数をしめしたものである。これによっても、大管区長の場合と同様に、中管区長の場合にも年齢が地位のわりには低かったということが気づかれるであろう。すなわち、四〇歳未満が五八人、すなわち全体の六四・四パーセントにのぼり、四五歳未満ということになれば、七五人、全体の八三・三パーセントにたっしているのである。[47]

㈡次に、これら中管区長のナチ党への入党の時期については、九〇人中八九人の入党の年（その大部分は月日も）を確認することができた。それをまとめたのが第二表である。これをさらに、一九二九年以前、一九三〇～三二年、一九三三年以降の三つの時期に分けて各時期における入党者数をまとめてみると、第三表のようになり、中管区長のなかにはいわゆる「古参の闘士」が圧倒的に多いことがわかる。ついでに、一九三〇年九月の国会選挙の前後で分けてみると、それ以前に入党した者が五五人、それ以後に入党した者が三一人（他の三人は不明）となり、ナチ党が国会へ大量進出をとげる以前に入党した者が優っていることが判明する。

㈢最後に職業については、八九人のそれが判明したが、それらはいずれも本人の記載（もしくは申立て）によるものとおもわれ、

職業の表記の方法もきわめて多種多様である。銀行官僚 Bank-beamter といった表記法もふくめて、この職業表記の多種多様性のなかに当時の中管区長の身分意識が反映しているとみなすことも可能である。第四表は、これらの雑多な職業をかなり大胆に整理してしめしたものであるが、そこから次のようなことを指摘しうるであろう。(a)労働者は少ない。(b)圧倒的に中間層にぞくする者が多く、なかでも商人、教師、手工業者が目立つ（この三つの職業グループだけで四一人、すなわち全体の四六・〇七パーセントにたっしている）。(c)職員・官僚等としてまとめたグループの内容はきわめて雑多であるが、その職業表記や彼ら個々の年齢などから推測して、その多くは下層中間層に分類しうると考えられる。(d)上層中間層のなかでは医師の進出が目だつこと。――これらの調査結果だけから何かまとまったことをいうのはむずかしいが、全体として、中管区長の間では下層中間層の出身者が優越していたことはほぼ間違いなく結論づけうるであろう。[48]

以上は、九〇人からなる中管区長のランダム・サンプルについてのごく単純な統計的調査の結果であるが、これによっても、一九三八～三九年当時の中管区長の平均的像について何ほどかの手がかりはえられたであろう。すなわち、彼らは比較的若く、その多くはすでに二〇年代にナチ運動にとびこんでいた「古参の闘士」であり、職業的には中間層の下層部分の出身者が多かったのである。

ところで、右のような単純な統計的調査からさらにすすんで、もっと具体的にナチ党中管区長の行動様式や思考様式を知ることはできないであろうか。わたしは、右の統計的調査をすすめる過程で、前述の「党内通信」の資料によって多少なりともこれらの点を明らかにすることにも努力した。もっとも、「党内通信」のかぎられた資料だけからは、これらの点について満足すべき結果をうることはむずかしかった。以下の報告も中途半端なものにとどまっていることをあらかじめことわっておかねばならない。

「党内通信」のなかには、各中管区長ごとに彼に関連して党機関相互の間でかわされた文書がファイルされている。それらのなかには、当該中管区長自身が大管区指導部に宛てた文書もあれば、また、大管区長が当該中管区長のことにかんしてミュンヘンの党本部におくった文書もふくまれている。さらに、党本部が大管区に宛てた回答文書も見出される。要するに、個々の中管区長に関連する多種多様な文書が「党内通信」のなかには見出されるのである。

それらを通観してまず気づかれることは、中管区長の給料にかんする文書が多いことである。中管区長は名誉職の場合もあった

が、その多くは有給の専従職であったようで、給料の明細書は、基本給のほかに妻および子供への手当、さらに機密費のようなものが支払われたことをしめしている。このように中管区長の大部分が有給の専従職であったことが、在来の名望家層とは違う階層のこの地位への進出を可能にした前提条件の一つであったことを見のがしてはならない。[49]

「党内通信」の中管区長にかんする資料のなかでさらに目につくのは、名誉章 Ehrenzeichen についての文書のやりとりである。ナチ党本部（担当は財務局長）は、積極的な党活動を表彰するために、年数に応じて金、銀、銅の名誉章を党員に授与した。たとえば、一五年間にわたる積極的な党活動にたいしては、銀の名誉章があたえられた。党歴計算にあたっては、党役員の在任期間は二倍に計算されたようである。この名誉章の獲得は中管区長にとっても大きな関心の的となり、「党内通信」のなかにはその申請にかかわる多くの文書が見出される。しかし、党本部は、名誉章を乱発するようなことはせず、申請にあたっても第三者の証明をもとめるなど厳格な態度をとり、要件をみたしていない場合には、執拗な申請があっても授与を拒んでいる。[50]

右の名誉章の問題とも関連するが、「党内通信」の資料は、中管区長の間で各自の党員番号（もしくは入党時期）にたいする関心もつよかったことを物語っている。党員番号は入党の順序にしたがって各党員にあたえられ、したがって入党の時期が早ければ早いほど若い党員番号があたえられた。それゆえ、党員番号の若いことは活動歴の古さをしめすものとして党員たちの誇りとされ、中管区長の間でもできるだけ若い党員番号（したがってまた早い入党年月日）を事後的にでも獲得したいという願望が生じたのである。ある中管区長は党本部の財務局長に宛てて、《自分は実際には一九三〇年六月に入党したのに手続上の齟齬のために入党年月日が一九三一年三月一日となっており、しかも党員番号はこの日付にも合致しない遅い番号になっている。どうか、実際にあわせて入党年月日をくりあげ、党員番号も変更してほしい》と書きおくっている。[51]

先の名誉章にせよ、この党員番号にせよ、これらの事柄にたいする中管区長たちのつよい関心は、彼らの思考様式を知るうえで重要である。すなわち、第三帝国時代のナチ党のなかでは、名誉章や党員番号によってしめされる新しい威信の秩序が形成されていたのであり、中管区長になったような人物は、こうした秩序のなかでより大きな威信を獲得することに熱心だったのである。[52]

こうして、中管区長は「小さな野心家」である場合が少なくなかったが、同時に、彼らのなかには、その地位を利用して私腹を

肥やしたり、私的な復讐感情で人びとに接するような者もいた。「党内通信」のなかには、そうしたことをしめす資料も散見される。[63] もちろん、わずかの資料だけから中管区長全体の道徳的水準をおしはかることは慎まねばならないが、地方指導者の質の問題が党本部にとっても大きな悩みの種であったことはたしかである。[64]

なお、中管区長の日常活動をしめす資料は、予想に反して「党内通信」のなかにあまり多くはない。わたしが閲覧しえた範囲では、たとえば一九四〇年五月のドイツ軍の西部大攻勢にたいして住民がどのような反応をしめしているかを大管区指導部に報告した文書とか、また、ヒトラーの来訪を歓迎する準備を管内の小管区長に指示した文書などが見出されるにすぎなかった。[65]

以上のようなわけで、わたしがベルリン・ドキュメント・センターにおいてナチ党の中管区長にかんしてあげえた成果は、まことに貧弱なものである。同センターで調査に従事中、たまたま、本稿でも何度かふれたカナダのカーター教授と知りあう機会をえた。教授は、ナチ党エリートの計量的分析をめざして、このセンターで尨大な資料の蒐集にあたっていたのである。帰国後トロントからわたしに寄せた手紙のなかで、教授は、一九四一～四二年当時の中管区長についても調査したので、いずれ、一九三八～三九年当時の中管区長にかんするあなたの調査結果と比較してみたいと書いてきた。ナチ党の地方指導者にかんしては、なおしばらくの間、こうした個別研究の積み重ねが必要とされるのであろう。

① R. Heberle, *Landbevölkerung und Nationalsozialismus. Eine soziologische Untersuchung der politischen Willensbildung in Schleswig-Holstein 1918–1932* (Stuttgart, 1963).

② A. Milatz, Das Ende der Parteien im Spiegel der Wahlen 1930 bis 1933, in: E. Matthias, R. Morsey, Hg., *Das Ende der Parteien 1933* (Düsseldorf, 1960), S. 755; G. Noakes, G. Pridham, ed., *Documents on Nazism 1919–1945* (London, 1974), p. 114; J. Holzer, *Parteien und Massen. Die Politische Krise in Deutschland 1928–1930* (Wiesbaden, 1975), S. 96 f., 101 f.

③ Th. Childers, The Social Bases of the National Socialist Vote, in: *Journal of Contemporary History*, Vol. 11, No. 4 (1976), pp. 17–42.

④ *Ibid.*, p. 29.

⑤ *Ibid.*, pp. 27 f.

⑥ M. H. Kater, Zur Soziographie der frühen NSDAP, in: *Vierteljahrshefte für Zeitgeschichte*, Jg. 19, 2. Heft (1971), S. 124–159.

⑦ *Ibid.*, S. 153.

⑧ Kater, Sozialer Wandel in der NSDAP im Zuge der nationalsozialistischen Machtergreifung, in: W. Schieder, Hg., *Faschismus als soziale Bewegung. Deutschland und Italien im Vergleich* (Hamburg, 1976).

⑨ *Ibid.*, S. 27–32. なお、カーターには、別に、学生とナチズムとの関係をあつかった次の書物がある。Kater, *Studentenschaft und Rechtsradikalismus in Deutschland 1918–1933* (Hamburg, 1975).

第 1 表

年　齢	人　数
20～29	7
30～39	51
40～49	27
50～59	5
計	90

第 2 表

入党年次	人数
1923	1
1924	1
1925	21
1926	6
1927	4
1928	11
1929	5
1930	19
1931	16
1932	4
1937	1
計	89

第 3 表

入党時期	人　数	%
1929年以前	49	55.06
1930～32年	39	43.82
1933年以後	1	1.12
計	89	100

第 4 表

職業分類	人数	%	個別的な職業の表記（右肩の数字は人数を示す。数字のないものは，1人を意味する。）
労　働　者	3	3.37	Arbeiter,[2] Dreher
手工業者	9	10.11	Buchdr. Meister, Schuhmacher, Schuhmachermeister, Uhrmacher, Scherer, Schlosser,[2] Kürschnermeister, Tischler
商　　人	19	21.35	Kaufmann,[18] Holzkaufmann
農　業　者	11	12.36	Landwirt,[8] Bauer[3]
獣　　医	2	2.25	Tierarzt[2]
教　　師	13	14.61	Lehrer,[10] Hauptlehrer, Oberlehrer, kfm. Lehrer
職員・官僚等	11	12.36	Reichsbahninsp., kfm. Beamter, städt. Verwaltungssekretär, Beamter, Forstamtmann, Kriminalbeamter, Handlungsgehilfe,[2] Bankbeamter,[2] Spaarkassenassist.
技　術　者	4	4.49	Ing.,[2] Textiltechniker, Techniker
自営業者	4	4.49	Färbereibesitzer, Fabrikant, Dampfziegelei, Gewerbebetrieb
医　　師	5	5.62	prakt. Arzt,[4] Arzt u. Zahnarzt
指導的地位の職員・官僚等	6	6.74	Handelsvertreter, Amtsvorsteher, Betriebsleiter, kfm. Vertreter (Generalvertreter der Waffenfabrik), Direktor der Werke, leitender Ing.
そ　の　他	2	2.25	landw. Insp., Prokurist
計	89	100	

㉑ Kater, Sozialer Wandel, S. 32–36.

㉒ H. A. Winkler, Mittelstandsbewegung oder Volkspartei? Zur sozialen Basis der NSDAP, in: Schieder, Hg., *op. cit.*

㉓ *Ibid.*, S. 97–99.

㉔ Winkler, *Mittelstand, Demokratie und Nationalsozialismus. Die politische Entwicklung von Handwerk und Kleinhandel in der Weimarer Republik* (Köln, 1972).

㉕ M. H. Kele, *Nazis and Workers. National Socialist Appeals to German Labor 1919–1933* (Chapel Hill, 1972).

㉖ *Ibid.*, pp. 167, 203, 110 f., 215; cf. Kater, Sozialer Wandel, S. 58, Anm. 36; Childers, *op. cit.*, p. 37, note 43.

㉗ J. Kocka, Zur Problematik der deutschen Angestellten 1914–1933, in: H. Mommsen u. a., Hg., *Industrielles System und politische Entwicklung in der Weimarer Republik. Verhandlungen des Internationalen Symposiums in Bochum vom 12–17. Juni 1973* (Düsseldorf, 1974).

㉘ *Ibid.*, S. 795–811.

㉙ H. A. Turner, Jr., Big Business and the Rise of Hitler, in: *American Historical Review*, Vol. 75, No. 1 (1969), pp. 56–70. なお、この論文はその後ドイツ語に訳され次の書物に収録されている。Turner, *Faschismus und Kapitalismus in Deutschland. Studien zum Verhältnis zwischen Nationalsozialismus und Wirtschaft* (Göttingen, 1972).

㉚ Turner, Big Business, p. 69.

㉛ Turner, Das Verhältnis des Grossunternehmertums zur NSDAP, in: Mommsen u. a., Hg., *op. cit.*

㉜ *Ibid.*, S. 920–929.

㉝ Winkler, German Society, Hitler and the Illusion of Restoration 1930–33, in: *Journal of Contemporary History*, Vol. 11, No. 4 (1976), p. 13.

㉞ Kater, Sozialer Wandel, S. 36 f.

㉟ *Ibid.*, S. 37 f.

㊱ *Ibid.*

㊲ Heberle, *op. cit.*

㊳ G. Stoltenberg, *Politische Strömungen im schleswig-holsteinischen Landvolk 1918–1933. Ein Beitrag zur politischen Meinungsbildung in der Weimarer Republik* (Düsseldorf, 1962).

㊴ W. Böhnke, *Die NSDAP im Ruhrgebiet 1920–1933* (Bonn-Bad Godesberg, 1974).

㊵ E. Schön, *Die Entstehung des Nationalsozialismus in Hessen* (Meisenheim am Glan, 1972).

㊶ J. Noakes, *The Nazi Party in Lower Saxony 1921–1933* (Oxford, 1971).

㊷ このほかに邦訳のあるものとして次の二書がある。W・S・アレン著、西義之訳『ヒトラーが町にやってきた』（昭和四三年、番町書房刊）。G・プリダム著、垂水節子・草永黎子訳『ヒトラー・権力への道――ナチズムとバイエルン一九二三――一九三三――』（昭和五〇年、時事通信社刊）。

㊸ Heberle, *op. cit.*, S. 171, Anm. 1.

㊹ *Ibid.*, S. 136 f., 170.

㊺ Noakes, *op. cit.*, p. 2.

㊻ *Ibid.*, p. 26.

㊼ *Ibid.*, p. 18.

㊽ *Ibid.*, p. 136.

㊾ *Ibid.*, pp. 249 f.

㊴ この点に関連して、J・P・スターンが、ヒトラーの独創性はふつう個人的―実存的領域にそなわっているとみなされている事柄を公的な政治の領域にもちこみ、それを政治の価値規準としたことにあるとのべていることに注意した。J. P. Stern. *Hitler. The Führer and the People* (Berkeley and Los Angeles, 1975), p. 23 f.

㊵ 拙稿「ヒトラーの社会革命」（拙著『二十世紀の政治指導』所収、昭和五十一年、中央公論社刊）

㊶ P. Hüttenberger, *Die Gauleiter. Studie zum Wandel des Machtgefüges in der NSDAP* (Stuttgart, 1969).

㊷ ベルリン・ドキュメント・センターにおいて中管区長の調査が可能であることを教示してくれたのは、昨年ボストン大学で快く会見に応じてくれたオルロウ教授である。なお、同教授は次の書物を書いている。D. Orlow, *The History of the Nazi Party*, 2 vols. (Pittsburgh, 1969, 1973).

㊸ 同センターについては、さしあたり次を参照。J. S. Beddie, The Berlin Document Center, in: R. Wolfe, ed., *Captured German and Related Records. A National Archives Conference* (Ohio, 1974), pp. 131–142; W. Benz, *Quellen zur Zeitgeschichte, Deutsche Geschichte seit dem ersten Weltkrieg*, Bd. III (Stuttgart, 1973), S. 46–57.

㊹ *Ibid.*, S. 46 f.

㊺ *Reichsband Adressenwerk der Dienststellen der NSDAP* (*mit den angeschlossenen Verbänden*) *und der Berufsorganisationen* (*in Kultur——Reichsnährstand——Gewerbliche Wirtschaft*). Herausgegeben unter Aussicht der Reichsleitung der NSDAP——Hauptorganisationsamt, München——unter Mitarbeit der Organisationsämter. Mit Lexikon=Wegweiser von A-Z. (Berlin, 1939). なお、この書物には次の記載がある。Gegen die Herausgabe dieses Reichsadresswerkes bestehen seitens der NSDAP keine Bedenken. Das Reichsadresswerk wird in der NS=Bibliographie geführt.

㊻ ただし、「党内資料」のなかに名前を発見できない中管区長もあった。その場合には、元のサンプルを変更し、同じ大管区内の別の中管区長を無作為にえらびなおした。これによってサンプルの無作為性がそこなわれることはそれほど大きくはないものと考える。

㊼ 中管区長の年齢にかんしては、次も参照のこと。P. Diehl-Thiele, *Partei und Staat im Dritten Reich. Untersuchungen zum Verhältnis von NSDAP und allgemeiner innerer Staatsverwaltung 1933–1945* (München, 1969), S. 142.

㊽ オルロウも中管区長の大多数が下層中間層の出身であったことを指摘している。Orlow, *op. cit.*, Vol. 2, pp. 168, 217.

㊾ Carl Zetzsche in: *Partei-Korrespondenz*, Berlin Document Center（以下、PK, BDC と略記する。）cf. Karl Walter in: *PK*, BDC.

㊿ Josef Windstetter, Wilhelm Seitz, Willi Ritterbusch etc. in: *PK*, BDC.

(51) Heinrich Scholdra in: *PK*, BDC. なお、党員番号と入党時期との関係については次を参照。Sammlung Schumacher, Nr. 376, Bundesarchiv Koblenz.

(52) 中管区長のステイタス志向型の心理については次も参照。Orlow, *op. cit.*, Vol. 2, p. 217.

(53) Max Else, Josef Ständer, etc. in: *PK*, BDC.

(54) cf. Orlow, *op. cit.*, Vol. 2, p. 257.

(55) Karl Steinacker, Hans Schiffmann, etc. in: *PK*, BDC. なお、中管区長の党内における位置については次を参照。Orlow, *op. cit.*, Vol. 2, pp. 172 f., 244, 278, 362 f., etc.

（一九七七、十一、二脱稿）

（京都大学助教授